

やまとうたは、人のこころをたねとして、よろづのここのはとぞなれりける、世中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを見るものきくものにつけていひいだせるなり、花になくうぐひす、水にすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるものいづれかうたをよまざりける、ちからをもいれずしてあめつちをうごかし、めに見えぬおに神をもあはれとおもはせ、をとこをむなのなかをもやはらげ、たけきものふの心をもなくさむるは、うたなり

このうた、あめつちのひらけはじまりける時よりいできにけり、あまのうきはしのしたにて、め神を神となりたまへる事をいへるうたなり、しかあれども、世につたはることは、ひさかたのあめにしては、したてるひめにはじまり、したてるひめとは、あめわかみこのめなり、せうとの神のかたち、をか、たにうつりてかかやくをよめるえびす哥なるべし、これらはもじのかずもさだまらず、うたのやうにもあらぬことども也、あらかねのつちにしては、すさのをのみことよりぞおこりける、ちはやぶる神世にはうたのもじもさだまらず、すなほにして、事の心わきがたかりけらし、ひとの世となりて、すさのをのみことよりぞみそもじあまりひともしはよみける、すさのをのみことは、あまてるおほむ神のこのかみ也、女とすみたまはむとて、いづものくにに宮づくりしたまふ時に、その所にやいろのくものたつを見てよみたまへる也、へやくもたついつもやへがきつまごめにやへがきつくるそのやへがきを、かくてぞ花をめで、とりをうらやみ、かすみをあはれび、つゆをかなしぶ心ことば、おほくさまさまになりける、とほき所もいでたつあしもとよりはじまりて、年月をわたり、たかき山もふもとのちりひちよりなりて、あまぐもたなびくまでおひのぼれるごとくに、このうたもかくのごとくなるべし、なにはづのうたは、みかどのおほむはじめなり、おほさざきのみかどの、なにはづにてみこときこえける時、東宮をたがひにゆづり

て、くらゐにつきたまはで、三とせになりにつければ、王仁といふ人のいぶかり思ひて、よみてたてまつりけるうた也、この花は梅のはなをいふなるべし、あさか山のことばは、うねめのたはぶれよりよみて、かづらきのおほきみをみちのおくへつかはしたりけるに、くにのつかさ、事おろそかなりとて、まうけなどしたりけれど、すさまじかりければ、うねめなりける女の、かはらけとりてよめるなり、これにぞおほきみの心とけにける、へあさか山かげさへ見ゆる山の井のあさくは人をおもふのものは、このふたうたはうたのちちはのやうにてぞ、手ならふ人のはじめにもしける、そもそもうたのさまむつなり、からのうたにもかくぞあるべき、そのむくさのひとつには、そへうた、おほさざきのみかどをそへたてまつれるうた、へなにはづにさくやこの花ふゆごもりいまははるべとさくやこのはなといへるなるべし、ふたつには、かぞへうた、へさく花におもひつくみのあぢきなさ身にいたづきのいるもしらずていへるなるべし、これはただ事にいひて、ものにとへなどもせぬものなり、このうたいかにいへるにかあらむ、その心えがたし、いつつにただことうたといへるなむこれにはかなふべき、みつにはなすらへうた、へきみにけさあしたのしものおきていなばこひしきことにきえやわたらむといへるなるべし

これはものにもなすらへて、それがやうになむあるとやうにいふ也、この哥よくかなへりとも見えず、へたらちめのおやのかふこのまゆごもりいぶせくもあるかいもにあはずて、かやうなるやこれにはかなふべからむ、よつにはたとへうた、へわがこひはよむともつきじありそうみのはまのまさごはよみつくとともといへるなるべし、これはよろづのくさ木とりけだものにつけて心を見するなり、このうたはかくれたる所なむなき、されどはじめのそへうたとおなじやうなれば、すこしさまをかへたるなるべし、へすまのあまのしほやくけぶり風をいたみおもはぬ方にたなびきにけり、この哥などやかなふべからむ、いつつにはただことうた、へいつはりのなき世なりせばいかばかり人のことのはうれし

からましといへるなるべし、これはことのととのほりただしきをいふ也、この哥の心さらになはず、とめうたとやいふべからむ、へ山ざくらあくまでいろを見つるかな花ちるべくも風ふかぬよに、むつにはいはひうた、へこのとはむべもとみけりさき草のみつばよつばにどのづくりせりといへるなるべし、これは世をほめて神につくる也、このうたいはひうたとは見えずなむある、へかすがのにわかになつみつよろづ世をいはふ心は神ぞしるらむ、これらやすこしかなふべからむ、おほよそむくさにわかれむ事はえあるまじき事になむ、今の世中いろにつき人の心花になりけるより、あだなるうた、はかなきことのみいでくれば、いろごのみのいへに、むもれ木の人しれぬこととなりて、まめなるところには花すすきほにいだすべきことにもあらずなりたり、そのはじめをおもへばかかるべくなむあらぬ、いにしへの世世のみかど、春の花のあした、秋の月の夜ごとに、さぶらふ人人をめて、ことにつけつうたをたてまつらしめたまふ、あるは花をそふとてたよりなき所にまどひ、あるは月をおもふとてしるべなきやみにたどれる心心を見給ひて、さかしおろかなりとしろしめしけむ、しかあるのみにあらず、さざれいにたとへ、つくば山にかけてきみをねがひ、よろこび身にすぎ、たのしび心にあまり、ふじのけぶりによそへて人をこひ、松虫のねにともをしのび、たかさごすみの江のまつもあひおひのやうにおぼえ、おとこ山のむかしをおもひいでてをみなへしのひとときをくねるにも、うたをいひてぞなくさめける、又春のあしたに花のちるを見、秋のゆふぐれにこののおつるをさき、あるはとしごとにかがみのかげに見ゆる雪と浪とをなげき、草のつゆ水あわを見てわが身をおどろき、あるはきのふはさかえおごりて時をうしなひ世にわび、したしかりしもうとくなり、あるは松山の浪をかけ、野なかの水をくみ、秋はぎのしたばをながめ、あかつきのしぎのはねがきをかぞへ、あるはくれ竹のうきふしを人にいひよしの河をひきて世中をうらみきつるに、今はふじの山も煙たたずなり、ながらのはしもつくるなりときく人はうたにのみぞ心をなくさめける、

いにしへよりかくつたはるうちにも、ならの御時よりぞひろまりにける、かのおほむ世やうたの心をしろしめしたりけむ、かのおほむ時に、おほきみつのくらあかきのもとの人まろなむうたのひじりなりける、これはきみもひと身をあはせたりといふなるべし、秋のゆふべ竜田河にながるもみぢをば、みかどのおほむめににしきと見たまひ、春のあしたよしの山のさくらは人まろが心にはくもかとのみなむおぼえける、又山の辺のあかひとといふ人ありけり、うたにあやしうたへなりけり、人まろはあかひとがかみにたむことかたく、あか人は人まろがしもにたむことかたくなむありける、ならのみかどの御うた、へたつた河もみぢみだれてながるめりわたらばにしきなかやたえなむ、人まろ、へ梅花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれば、へほのぼのとあかしのうらのあさぎりに島がくれ行く舟をしぞ思ふ、赤人、へ春ののにすみれつみにとこし我ぞのをなつかしみひと夜ねにける、へわかの浦にしほみちくれば方をなみあしべをさしてたづなきわたる、この人人をおきて又すぐれたる人もくれ竹の世世にきこえ、かたいとのよりよりにたえずぞありける、これよりさきのうたをあつめてなむ方えふしふとなづけられたりける、ここにいにしへのことをもうたの心をもしれる人わづかにひとりふたりなりき、しかあれどこれかれえたるころ、えぬところたがひになむある、かの御時よりこのかた、年はももとせあまり、世はとつぎになむなりにける、いにしへの事をもうたをも、しれる人よむ人おほからず、いまこのことをいふに、つかさくらあかき人をば、たやすきやうなればいれず、そのほかにちかき世に、その名きこえたる人は、すなはち僧正遍昭は、うたのさまはえたれどもまことすくなし、たとへばゑにかけるをうなを見ていたづらに心をうごかすがごとし、へあさみどりいとよりにかけてしらすつゆをたまにもぬけるはるの柳か、へはちすばのにこりにしまぬ心もてなにかはつゆをたまとあざむく、さがのにてむまよりおちてよめる、へ名にめでてをれるばかりぞをみなへしわれおちにきと人にかたるな、ありはらのなりひらはその心あまりてことば

たらず、しばめる花のいろなくてにほひのこれるがごとし、へ月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にして、へおほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの、へねぬるよのゆめをはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな、ふんやのやすひではことばはたくみにて、そのさま身におはず、いはばあき人のよききぬきたらむがごとし、へ吹からによもの草木のしをるればむべ山かぜをあらしといふらむ、深草のみかどの御国忌に、へ草ふかきかすみのたにかげかくして日のおくれしけふにやはあらぬ、宇治山のそうきせんは、ことばかすかにしてはじめをはりたしかならず、いはば秋の月を見るにあかつきのくもにあへるがごとし、へわがいほはみやこのたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふなり、よめるうたおほくきこえねば、かれこれをかよはしてよくしらず、をのこまちは、いにしへのそとほりひめの流なり、あはれなるやうにてつよからず、いはばよきをうなのなやめる所あるにいたり、つよからぬはをうなのうたなればなるべし、へ思ひつつぬればや人の見えつらむゆめとしりせばさめざらましを、へいろ見えてうつろふものは世中の人の心の花にぞありける、へわびぬれば身をうきくさのねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ、そとほりひめのうた、へわがせこがくべきよひなりささがにのくものふるまひかねてしるしも、おほとものくろぬしは、そのさまいやし、いはばたきぎおへる山びとの花のかげにやすめるがごとし、へ思ひいでてこひしき時はつかりのなきてわたると人はしらずや、へかがみ山いざたちよりて見てゆかむとしへぬる身はおいやしぬると、このほかの人人その名きこゆる、野辺におふるかづらはひひるごり、はやしにしげきこのはのごとくにおほかれど、うたとのみ思ひてそのさましらぬなるべし、かかるにいますべらぎのあめのしたしるしめすこと、よつの時このかへりになむなりぬる、あまねきおほむうつくしみのなみ、やしまのほかまでながれ、ひろきおほむめぐみのかけ、つくば山のふもとよりもしげくおはしまして、よろづのまつりごとをきこしめすいとま、もろもろの

ことをすてたまはぬあまりに、いにしへのことをもわすれじ、ふりにしことをもおこしたまふとて、いまもみそなはし、のちの世にもつたはれとて、延喜五年四月十八日に大内記きのともり、御書のところのあづかりきのつらゆき、さきのかひのさう官おほしかふちのみつね、右衛門の府生みぶのただみねらにおほせられて、万えふしふにいらぬふるきうたみづからのをもたてまつらしめたまひてなむ、それがなかにむめをかざすよりはじめて、ほととぎすをきき、もみちををり、雪を見るにいたるまで、又つるかめにつけてきみをおもひ人はひ、秋はぎ夏草を見てつまをこひ、あふさか山にいたりてたむけをいのり、あるは春夏秋冬にもいらぬくさぐさのうたをなむえらばせたまひける、すべて千うた、はたまき、名づけてこきむわかしふといふ、かくこのたびあつめえらばれて、山した水のたえず、はまのまさごのかずおほくつもりぬれば、いまはあすかがはのせになるうらみもきこえず、さざれいしのいはほとなるよろこびのみぞあるべき、それまくらことば、春の花にほひすくなくして、むなしき名のみ秋の夜のながきをかこてれば、かつは人のみみにおそり、かつはうたの心にはぢおもへど、たなびくくものたちあなくしかのおきふしは、つらゆきらがこの世におなじくむまれて、このことの時にあへるをなむよろこびぬる、人まろなくなりたれど、うたのこととどまれるかな、たとひ時うつりことさり、たのしびかなしびゆきかふとも、このうたのもじあるをや、あをやぎのいとたえず、まつのはのちりうせずして、まさきのかづらながくつたはり、とりのあとひさしくとどまれば、うたのさまをもしり、ことの心をえたらむ人は、おほざらの月を見るがごとくにいにしへをあふぎて、いまをこひざらめかも